

# Scramble Shot

出でのスタートを心配したが、立派に幕切れまで歌った後、第2幕で通常通り「神よ！」と歌い始めた時には、美しい弱声が聴衆の心に染み入った。シモーネ・ヤングに率いられたアンサンブルは、4年前のプレミエでファビオ・ルイジが聴かせた静謐さに到らないまま、第1幕もドタバタと終わってしまったので、フォークトのこの噴きの歌で初めて、劇場の空気が引き締まり、流れが変わった。

レオノーレのエルザ・ファン・デン・ヘーヴァーも太い声のまま、自在に転がるテクニックがスリリングだが機械的にはならず、フロレスタンへの愛が存分に表現されていた。再会の二重唱の最後は、さすがのフォークトも少々苦しそうだったが、それは声楽的な曲作りをしていないベートーヴェンの落ち度とも言える。愛にあふれる二重唱を聴かせた主演二人のおかげで、このすべての装飾を排した「箱入り演出」が生きた。ホモキ総裁は、この二人をプレミエ時のキャストに抜擢すべきであった。(中 東生)



劇場の空気が引き締まったフォークトの歌唱。カーテンコールから。中央フォークト ©中東生

## Opera フォークトがフロレスタンを歌った、チューリヒ歌劇場《フィデリオ》

4年前に、チューリヒ歌劇場によるベートーヴェン《フィデリオ》のプレミエ公演をレポートしたが、今回は、昨年タンホイザー役デビューに成功し、日本でも繊細なタンホイザーを聴かせたクラス・フロリアン・フォークトのフロレスタンに期待をかけ、11月26日の再演を観た。「タンホイザーは冒頭からヴェニスベルクの重いパートが出てくるので敬遠していた」と以前語ったフォークトにとっては、殺されそうになるクライマックスから始まり、もう一度、全曲を歌わなければならないアンドレアス・ホモキの演